

学部

2018（H30）年度  
「卒業生満足度調査結果の検討」

大学院

2018（H30）年度  
「修了生満足度調査結果の検討」

大阪電気通信大学

教育開発推進センター

Center for Educational Development (CED)

## 目次

### 学部

#### 2018 (H30) 年度 「卒業生満足度調査結果の検討」

工学部		
電気電子工学科	.....	4
電子機械工学科	.....	12
機械工学科	.....	13
基礎理工学科	.....	15
環境科学科	.....	17
情報通信工学部		
情報工学科	.....	20
通信工学科	.....	23
金融経済学部		
資産運用学科	.....	25
医療福祉工学部		
医療福祉工学科	.....	26
理学療法学科	.....	29
健康スポーツ科学科	.....	30
総合情報学部		
デジタルアート・アニメーション学科	.....	32
デジタルゲーム学科	.....	33
情報学科	.....	34
共通教育機構		
人間科学教育研究センター	.....	37
英語教育研究センター	.....	39
数理科学教育研究センター	.....	40

### 大学院

#### 2018 (H30) 年度 「修了生満足度調査結果の検討」

大学院	工学研究科		
	先端理工学専攻	.....	43
	電子通信工学専攻	.....	44
	制御機械工学専攻	.....	45
	情報工学専攻	.....	46
大学院	総合情報学研究科		
	デジタルゲーム学専攻	.....	47
	コンピュータサイエンス専攻	.....	48
大学院	医療福祉工学研究科		
	医療福祉工学学専攻	.....	49

学部

2018（H30）年度

「卒業生満足度調査結果の検討」

## 2018 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 5 日

工学部 電気電子工学科

2018 年度主任 海老原 聡

設問ごとに回答を整理しながら、以下に検討する。

### 選択式設問

**[A] 本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか。**

全ての項目の獲得度で、本学科の平均値は寝屋川キャンパス全体の平均値を上回った。特に、「国際的な視野（異文化交流）」は 0.4 ポイント高かった。昨年度も同様な傾向がみられた。伊与田研究室を中心に、卒研生でも卒業研究に関する発表を海外で行わせるなどの試みがある。実際に海外へ行く学生はごく少数であっても、そのような学生を中心に経験を伝えるようなことがされ、全体的なレベルアップに結び付いたかもしれない。

**[B] 本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください。**

学科の教育に係る項目 1～7 で、「卒業研究やゼミにおける指導」だけが寝屋川キャンパス全体の平均値を 0.1 ポイント下回った。統計的には、本学科の卒業研究のレベルは寝屋川キャンパス全体と同様を受けとめるが、この項目だけで唯一平均を下回ったため、卒業研究に関しては、次の自由記述でも注視することにする。

### 自由記述設問

各設問で、とくに学科の教育に関するものに対し以下のように考察と検討をした。

**[D] あなたが本学でよかったと思う点**

学科の有志教員により電験講習会を実施するなどにより資格支援を充実させているので、以下のような資格支援に肯定的な意見があった。

電験（資格）の勉強会を開いてもらえた点。

電験の勉強会やシーケンスの勉強会等、資格がとりやすい環境。

資格取得が行いやすかった

資格制度

資格取得の際、適切な指導をしていただけた点。

本学科は基礎的な科目だけでなく、ほとんどの学生は卒業後に電気電子関係の業界へ就労することを念頭に、専門科目を充実させるようにしており、これが以下の肯定的なコメントにつながったと考えている。

専門的なことを学べたので良かった  
分野ごとに専門の教員がいたこと。  
専門科目がとてもよかった。  
分野ごとに専門の教育があり、適切な指導をいただけた点。  
専門分野を深く学べた  
専門分野を学ぶことで知識を得ることができました  
自分の興味のある研究ができた。  
専門分野の学習

本学科では、1年次生から実験科目を多く配置し、卒業研究でも実験を多く行うため、次のようなコメント：

実験・実習など、他人と協調して物事に取り組める機会が多い。  
実験が幅広い分野で、知識が身についた。  
実験設備が豊富な点。  
実験では様々な測定や実験器具を扱わせて頂き、充実していた。  
実験でのラジオ製作がこれまでにない体験だったので楽しめた  
設備がよく充実していたところ

を受けることができた。実験科目により実学教育を実践しており、今後も充実させていくことにする。本学科では離学対策等を念頭に、学生達の気持ちをよく聞き、親身に指導するようにしており、この結果は以下のコメントにより評価されていると考えている。

学科教員の熱意  
聞きに行けば適切な指導をもらえたので理解しやすかった。  
教職や研究の指導を的確にさせていただきました。  
教授との仲が非常に良かった。特にゼミの伊藤先生。  
教員がやさしい  
教員の教え方がよかった。  
教員が皆さんしんみでやさしかった。  
分野ごとに専門の教員から授業等で指導を受ける事が出来る点はすごく良かったと思います。  
基礎から勉強できた  
教員の分かりやすい指導。研究室では、同室の人との仲が深まった。  
就職活動や授業外で教授達と仲良くなることができた。

1年次から新入生合宿、科目の勉強会など、コミュニケーションを重視しており、以下のような他の仲間との交流を良い点としてあげていた。

同期や他学科、後輩、先輩との仲を深めることが出来た。  
同期達と協力することで課題をこなしていくことでコミュニケーション能力が向上したこと。  
学科内の仲がよく、勉強を教えあえること  
年次による隔たりがなかった。

近年、学生課の主導により、課外活動の充実が図れており、課外活動に対する肯定的なコメント：

課外活動たのしかった。  
委員会に属していたので、色々な成長ができました。  
部活動がとても楽しかった

を受けることができた。

### **[E] あなたが本学で改善すべきと思う点**

本欄は要改善項目として重要であるので、学科に関連した記述全てを以下に掲げ、考察する。卒業研究に関する改善、とくに評価方法の再考を求めるコメント：

卒研の合格基準が低い所を直すべき  
卒研の合格基準が甘い  
研究が不十分でも卒業できる  
卒業研究の動き始めが遅かったのもう少し余裕をもってとり組みたかった。

があった。上記コメントは「合格基準が低い」ということに集約され、今後、学科で時間をかけ、状況の分析と対策を練ることにしたい。実験授業に関しては

実験の班分け

が課題である旨のコメントがあった。毎回、同じメンバーによる実験だと協働の訓練にならないという意見を受けていることは承知しているので、上記コメントはこのことに対応していると思われる。実験上の性質により、班分けを変更することができないことがあるが、今後注意をしていくことにする。プログラミング等の情報科目については

情報系（プログラム等）の授業で詳しく説明があまりなされていないのに授業課題等をやっても意味がない と思いました。生徒の質問等も TA にしか出来なかったので授業を理解する事に苦しみました。

のコメントを受けた。一方では、次節で、情報系（プログラム等）の科目で良好な評価をしているコメントもあった。多様な学生がいることも踏まえて、情報教育に関して状況分析が必要と考える。学生へ

の情報伝達に関しては

重要なことをもっと早く知らせしてほしい

メールが遅いことがある。

休講がわからない。

メールと掲示板、両方に出るお知らせと掲示板にしかでないお知らせがあり、少し困った。掲示板のみにしか出てないお知らせもメールで送信してほしいと思った。

行事予定等がマイページ等でもっと分かりやすくなると助かったと思います。

のコメントがあった。学生への周知方法が書面の掲示から電子的な方法に移行しており、学生への周知は早期に OECU My page を活用して行う方向で学科内で確認する。異なる学年の学生どうしの交流については、

先輩・後輩との関係があまりなかった。

下級生と上級生の関わる場が少ないと感じた。

のコメントを受けた。前節ではむしろ交流できたことを評価するコメントがあったため、学生ごとに交流のきっかけをつかめた場合とそうでなかった場合があるのかもしれない。このことを念頭に、学年間の学生の交流を高めていくことを検討したい。学生が多様化することで

工作をもっとしたかった

就職活動の幅を最広くして学生に伝えるべき

のようなコメントがでてきており、学生の能力を生かす方向で指導していくことが必要であることを再認識した。コメント：

うるさい生徒への対応策を…

は授業中のマナーを指しているものと思われ、非常勤講師の先生も含めて、より授業に集中するような指導ができるようにしていく。大学構内でのマナーとして

カードゲーム無くすべき。イメージが悪くなる。

というコメントがあった。カードゲームについては、学内の公共の場所で、仲間どうしでカードゲームを行っていることを指しているかと思われる。学内に遊戯場的なところは必要ではあるが、あまり目立つような行動は慎むように指導していくことが必要である。

教職の授業に関して以下のコメント：

教職関連の告知が遅い  
教職の授業をもっとましにしてほしい。  
教職の内容（教育の方法と技術、教職実践演習→時期）

を受けた。とくに、教職科目については厳しい意見があり、これらは教職課程委員会を通じて、学科でも状況を把握していくことにする。英語に関しては

英語の教養  
英語をもっと使うようにする。

のコメントがあり、英語の授業だけでなく、英語を実践的に使うような場が求められているのかもしれない。以後、学科内で検討したい。ドイツ語に関しては

ドイツ語の履修難度

という記述があった。

#### **[F]あなたにとってとくに役に立った、あるいは印象に残っている科目名**

実験科目に対するコメント：

実験 2：実機を使えた点。  
実験 3：実機を使えた点。  
実験 4：実機を使えた点。  
電気電子工学実験：様々なことを学んだ。勉強面以外でも。  
実験（すべて）：オシロスコープの使い方

があり、学生たちが実験の科目から座学で得られない経験を獲得しているようすがわかった。1年次の必修科目である電気数学は単位取得が難しい科目と言われているが、いくつかのコメント：

電気数学：2、3年での勉強に役立った。  
電気数学：学年が進むにつれて必要性を感じた。  
電気数学（小見山）：最も苦勞した科目だが、基本を学ぶことができた。  
電気数学：基礎的な計算を学べた

によると、単位取得に苦勞しながらもその後の勉学に役に立っているようすがわかった。学科教員による専門科目は困難なところがあるが、これらの科目の学修は電気電子工学科で在学した証となるようなものである。以下のコメントで、これらの科目を学生が努力しながら知識の獲得をしている様子がわかった。



基礎電磁：資格取得などの手助けとなった。  
電磁気学：楽しかった。  
電磁気学：電磁波について  
電気回路1：これからの基礎になる  
電気回路2：考える力が身につく。  
電気回路：電気系の仕事に就くため  
電気回路演習：分かりやすく覚えやすかったこと  
電子回路：ていねいにおしえてくれたのでわかりやすかった  
半導体工学：各それぞれの性質  
半導体工学：必修の授業でしっかり話をきかないと理解が難しかった。  
半導体デバイス：全員でディスカッションを行うのでよい。  
制御工学（伊藤先生）：専門を分かりやすく黒板・配布プリントで解説があり良かったです  
小見山先生：知っていることが多く、豆知識もふくめて非常にためになった。  
海老原先生：講義に対する担当者としての取り組みがとても丁寧だと感じた。

情報関係は以下のように、肯定的なコメントがあった。

コンピュータリテラシー：wordの使い方などを学びました。  
コンピューターリテラシー：パソコンの使い方を学べた。  
情報工学：専門用語が多く難しかった  
プログラム（渡辺）：アルゴリズムを学びました。  
プログラミング（渡辺）：プログラミングのすごさがよくわかった。

学外の非常講師の先生にお世話になっている科目も、以下のように肯定的な評価を受けている科目があった。

ロボット制御（森實先生）：資格を取るときにあると便利な知識  
CAD：何も知らない状態でも分かりやすく面白い  
白畑先生（電気電子材料）：ためになる話があった  
音響工学：実際にバイノーラルマイクをつかって体験したから

なお、企業連携講座については

きんでん講座：実際の業務について知れた

のコメントがあった。本科目は学科の特長としている科目であり、今後も推進したいと考えている。前節で卒業研究の評価について要望が出た卒業研究であるが、

卒研（伊藤）：自分で動くことを学べました。

卒研：専門的な知識が身についた

という卒業研究の活動自体は評価するコメントがあった。なお、ASにご担当頂いている科目で微分積分や、AEセンターの英語やAHセンターの中国語は好評を得ているものがあることがわかった。

微分積分；計算の仕方を上手に教えてくれた

微積分：計算力がついた。

微積分：西本先生がとても分かりやすく教えてくれた。

微分・積分：高校までの数学の復習することができた。

英語：将来出きて損はないのでしておいたほうがいい

英語：教職員が分かりやすく教えてくれた

カルモナ・ダニエル：全てが役に立つ

英語：発音の仕方がうまかった

英語：様々な教育方が用意してあり、楽しく学べた。

英語：理系大学でもしっかりと学べたこと

中国語（王少鋒）：中国語を楽しく学べた。

しかしながら、

ドイツ語（湯なんとか）：全てが謎、理不尽

というものもあった。

## **[G] あなたの現在の感想も含めて、大阪電気通信大学への要望、提案など**

卒業研究の研究室の基本設備について

研究室の窓が空かなかった。

があり、学科内で確認していく。学年間の交流に関しては

学年上下間の関わりが少ないので、情報を交わす事が出来るようにしたらもう少し授業等の理解にも近くと思います。

というコメントがあり、今後に交流を増やすようなことを行っていくことを検討する。教職科目については、前節にあったように

教職科目以外はよかった。

よいう反応があり、調べていきたい。なお、大学への設備の要求は学科で扱うものでないと思いますが、以下のコメントがあった。

喫煙所が少ない。部活動をもっと活動しやすい環境にしてほしい

工事がびみょうな時期にあった

食堂をもっと安くしてほしい

G号館たて直せ

食堂の席がもっと欲しかったです。

サークルの部屋をつくってほしい

生協学生委員会が外部組織ということで、変なあつかいをやめてほしい。

文化系の部活にもっと力を入れてほしい。

以上

## 2018 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019年7月15日

工学部 電子機械工学科

2018年度主任

兼宗 進

2018年度の卒業生満足度調査を学科で検討しました。報告いたします。

### (比較的高い満足度を維持した項目)

- 「A1. 幅広い教養」については3.7と比較的高い評価を維持している。これは自由回答で「様々な分野の知識を得やすかった」「幅広い分野を学ぶことができた」と書かれているように、電気・機械・制御・情報を中心に、それらの基礎となる幅広い内容をカリキュラムで対応していることが原因と思われる。
- 「A2. 専門的な知識・技能」も3.9と比較的高い評価を維持している。これは自由回答で「専門科目が多くよかった」「専門の教員がいた」と書かれているように、分野ごとの教員が深い専門性を持って教育を担当していることが原因と考えられる。
- 「A3. 論理的に考える力」も3.8と比較的高い評価を維持している。これは自由回答で「個別に対応してもらえた」「適切に指導してもらえた」と書かれているように、低学年からのグループ担任制などを通して教員と対話的にものごとを考える経験が原因と考えられる。
- 「A10. 協調して取り組む力」も3.8と比較的高い評価を維持している。これは自由回答で「授業や実験で同級生と協力できた」「友人と切磋琢磨し成長できた」と書かれているように、低学年からの実験や実習の機会が用意されていることが原因と考えられる。
- 「B4. 専門科目（講義）」については3.8と比較的高い評価を維持している。これは自由回答で「分野ごとに専門の教員がいて、適切な指導をいただき、とても分かりやすかった」と書かれているように、教員がそれぞれの専門分野について、専門性を維持しながらわかりやすい授業の工夫を行ったことが原因と考えられる。
- 「B5. 専門科目（実験など）」も3.9と比較的高い評価を維持している。これは自由回答で「色々楽しくでき、学ぶことも多くよかった」と書かれているように、講義で学んだ内容が実際にどのような役立つのかを実習を通して学ぶことができたことが原因と考えられる。
- 「B6. 卒業研究やゼミ」は3.9から4.1に評価が向上した。これは自由回答で「先生方、院生の方々に丁寧に指導していただき、多くのことを学びました」と書かれているように、学生の個々の興味や関心に合わせたテーマ設定を行い、1年間の指導計画を通して適切な卒研指導を行えたことが原因と考えられる。

### (改善を要すると考えられる項目)

- 「A7. 国際的な視野」は前年度より向上しているものの、評価は2.7から3.1とそれほど高くない。今後は海外の先端の情報を英語で触れる機会を増やしたり、ゼミなどで英語の文献に触れる機会を増やすなど、無理のない範囲で改善を図りたい。
- 自由回答では学生連絡に関する要望が多かった。今後は紙の掲示だけでなく、MyPortalなどのシステムを利用したスマートフォンで閲覧可能な情報提供を進めたい。

以上

## 2018 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 1 日

改訂版 2019 年 11 月 18 日

工学部 機械工学科

2018 年度主任 山本 剛宏

### [A] 学生が獲得した知識・能力に関する項目について

学生が獲得した知識・能力に関する項目では、「国際的な視野」の項目は、昨年度に比べて上昇しているものの他の評価項目に比べて低くなっている。特に、「獲得していない」、「あまり獲得していない」の回答をした人の数が他の項目に比べて多くなっている。この傾向は昨年、一昨年と同様であり、機械工学科だけでなく、工学部全体でも同様になっている。これは、本学には留学生が少なく、外国人との交流がほとんどないことが学生の評価に現れていると考えられる。この問題は学科単独で解決できる問題ではなく、大学全体で議論すべき問題である。

また、「困難に直面してもそれに対処していく力」「他人と協調して物事に取り組む力」の項目では、昨年度からの上昇ポイントが高くなっている。これは、学生の社会人基礎力の獲得を推進する学科・大学の取り組みが結果として現れてきているものと考えられる。自由記述欄において、本学でよかったと思う点として「教員と学生の距離が近くわからない所をすぐに聞ける点がよかった」、「教授方が非常に親切で、気軽に話しかけることができたこと」、「同期との交流の機会が多く、仲を深めるのに丁度よく、自分から動けば相応のコミュニケーションの幅をとれるようになっていた事」など教員とのコミュニケーションやクラブやサークル・学科内での学生間交流が多く挙げられており、このような点も上記の能力が身についたと評価する要因になっているものと考えられる。学科の教員は、学生に関する情報を学科会議において共有するなど、学生とのコミュニケーションを重視し授業や研究指導に当たっており、そのような取り組みの成果が現れたものとする。引き続き、教員と学生との交流や学生間の交流がしやすい雰囲気を学科や大学全体で作り出して行くことが大切であると思われる。

### [B] 授業科目群、教育設備・機器に関する項目について

授業についての評価を見ると、総合科目の評価が全体に上昇し、特に「英語以外の外国語」では 0.5 ポイントと大幅な上昇が見られた。これらについては各センターの教員の貢献に感謝したい。評価の低下が見られるものとしては、0.1 ポイントと微減ではあるが、「卒業研究やゼミにおける指導」が挙げられる。「よかった」および「ややよかった」との評価が約 66%と高い割合を示している一方で、「やや悪かった」および「悪かった」との評価が約 9%ある。卒業研究は、大学における教育の集大成とも言えるものであり、「やや悪かった」および「悪かった」と感じる学生数を減らすように、今後研究室における指導の改善すべき点を検討していく必要があると思われる。また、自由記述欄を見ると「授業の速度が少し遅かった」、「もっと多くの科目があってもよいかと思った」との回答があり、さらに高度な講義内容を希望する意見も見られる。このような要望については、機械工学の主要科目に設定されている演習科目において、より高度な内容の学習課題や自学のための資料を準備することで、より進んだ学習を希望する学生の要望に答えられるような授業改善を進めていきたい。

## 総合評価について

総合評価は昨年度の 6.7 に対して今年度は 7.0 と 0.3 ポイント上昇している。上記の[A], [B]の項いずれの項目においても小計は昨年度よりも評価の上昇が見られており、その結果が総合評価の上昇につながっていると考えられる。引き続き、教員個人および学科全体で改善可能な点については、評価および自由記述を見ながら改善を図り、総合評価の上昇に務めていきたい。

## 2018年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019年7月11日

工学部 基礎理工学科

2018年度主任 安江 常夫

### 1. 大学生活における知識や能力などの獲得について

全体を通しての平均値は前年度と同じであり、例年並みの満足度となっている。しかし個別にみると、専門的な知識・技能、物事を論理的に考える力、的確な判断力、自ら課題を見つけそれに取り組む力といった、本来高い満足度を指すべき項目で前年度より0.1ポイント低下している。これについては学科として真摯に受け止め、講義科目では理解度の向上に向けた改善、実験・実習・ゼミナールといった学生主体の科目においては、学生の興味を湧き立たせるようなテーマ設定や、より活発な議論の展開など新カリキュラムに向けて検討していくべき課題があることが認識できた。自由記述の回答において、「基礎理工学ゼミナール等で、先輩や後輩との関わりがあり、仲が深まりやすかった。」「先輩、後輩と授業を受ける機会が基礎理工ゼミナールであったため、上下の関係を大いに作ることが出来た点。」といった基礎理工学ゼミナールに関する意見があった。基礎理工学ゼミナールでは、学年横断型プロジェクト学習を行ってきたが、それが上下関係の構築につながったものと捉えることができる。しかしその一方で、「横のつながりは、十分にあったが縦のつながりが少なかったかと思いました。もう少し、縦のつながりが出来る様、改善を期待する。」「私は自発的に行動し、先輩も後輩も交流があったのですが、もっと上下の関わりをもてるような行事があればよいと思います。」という意見もあり、基礎理工学ゼミナールをはじめとする取り組みの意図が十分に理解されていないことも明らかとなった。こうした意見を踏まえて、学年の垣根を超えたプロジェクト学習、アクティブラーニングの実施形態について今一度点検をし、新カリキュラムの実施に反映させていきたいと考えている。

一方で、国際的な視野については総じてポイントが上がっており、これは特に卒研において海外の研究動向を知ったり、実際に海外で研究を行ったりといった経験を積んだことによるものであると考えている。

工学部全体の平均値とも大きな差異はなく、本学科のみが特に後れを取っているということではないが、今後は本学科独自の試みを行い、本学科の特徴が目に見える形にしていきたいと考えている。

### 2. 授業科目群や教育設備・機器に関する評価について

授業科目群の評価については平均値は前年度と同等であるが、英語以外の外国語科目に対する評価が前年度より大きくアップしている。その反面、基礎専門科目・専門科目の実験・実習・演習などと卒業研究やゼミにおける指導でポイントが下がっている。これは前項の結果と同期していると考えられるので、学科として学生の満足度が向上できるよう精査していく必要があると思われる。

また、基礎理工学科では教員免許の取得に向けた支援を積極的に行ってきたが、「理科教育法の講義もう少し実践的なことを教えてほしかった。教育実習で、他の大学生は知っているのに、自分は習っていない、知らない、というのが多かった。」「教職科目を受講しても、それが教育実習で発揮することがほとんどない。学んだことがしっかりと活かすことができない内容ではないと感じた。」といった意見が見られた。教職科目に関しては学科専門科目ではないので改善をするのは容易ではないが、教職生から実践

的な能力を身に着ける必要性の声が出ていることを関係部署と共有し、改善に向けて努力をしていきたいと考えている。

教育設備・機器の評価についても、ほぼ前年度並みであるが、授業用実験室の設備・機器の充実度に関する満足度が前年度に比べやや低くなっている。実験設備については、特に前年度から変えたところはないので、学生の受け止め方が変わったものと推察している。

その他では就職課の事務サービスに関する満足度がやや下がっている。2018年度は就職率がアップしており、その結果とは相反する満足度となっている。これについては、就職課担当者と連絡を密にしながら、より手厚い就職指導を行うことで満足度の向上を目指していきたい。

### 3. 総合評価について

総合評価についても、前年度と同じ満足度であったが、工学部全体の平均値と比べると0.1ポイント低くなっているため、上記で述べたような改善を図りながら満足度の向上を目指していきたい。



# 2018 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 1 日

工学部 環境科学科

2018 年度主任 中田 亮生

## 1. はじめに

環境科学科の 2018 年度卒業生満足度調査結果について、学科会議などで検討した。ここでは、その結果の概要と検討内容、満足度向上のための対策について報告する。

## 2. 環境科学科の調査結果の概要

2018 年度の環境科学科、工学部全体、大学全体、及び、環境科学科 2017 年度のそれぞれの獲得数値の合計を表 1 にまとめた。総合評価は 2017 年度同様高い水準を保っているが、知識・能力の獲得に関して獲得数値が低下した。

表 1. 獲得数値の合計のまとめ

	U	工学部	全体	U2017 年度
[A] 知識・能力の獲得	3.4	3.5	3.5	3.5
[B] 授業科目群や教育設備・機器など	3.6	3.6	3.6	3.6
[C] 総合評価	7.2	7.1	7.0	7.2

### [A] 知識・能力の獲得

知識・能力の獲得については、2017 年度と比較して全体的に低下傾向にあった。幅広い分野にわたる教養と専門的な知識・技能 (1, 2) いずれも 3.7 ポイントと比較的高い獲得度を示しているが、前年度と比較すると 0.1 ポイント低下している。当学科では、サイエンスとエンジニアリングの幅広い知識を習得できるようなカリキュラムを構成しているが、キャップ制などにより取得できる科目数が減少してきたことも一因だと考えている。また、論理的思考力や判断力なども (3~5) については 3.6~3.7 ポイントと概ね高い獲得度を示している。一方で、困難に対する対処力 (6) は 3.7 ポイントから 3.5 ポイントへと低下し、教育の負荷が低下した可能性があると考えた。これは、学生のレベルが向上した一面を示していると考えられる。しかしながら、国際的な視野 (7) は 2.8~3.0 ポイントと相対的に低い。学生たちの話を聞いたところ、社会のグローバル化に敏感であり、もっと国際的な視野を獲得したいという気持ちの表れであることが示唆された。また、コミュニケーション能力 (8) は 3.5 ポイントと横ばいであるが、リーダーシップ (9) と協調力 (10) が 2017 年度よりも 0.1 ポイントずつ向上した。なお、総合平均は工学部と大学全体がいずれも 3.5 ポイントであったが、環境科学科は 0.1 低い 3.4 ポイントであった。

### [B] 授業科目群や教育設備・機器など

授業科目群で相対的に高いのは、基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など) (5) と卒業研究やゼ

ミにおける指導(6)で、3.8～3.9の高いポイントを示す。逆に低いのは総合科目群である。これは、自由記述欄にもあるように、社会にでて役に立つ科目・内容の学習を希望している学生が多いことを示しており、より実践に近い科目のポイントが高い傾向にある。図書館、パソコンなどのIT、講義室、実験室などの設備(8～13)は概ね、3.5から3.8ポイントと評価が高い。シラバスや事務サービスおよび留学制度(15～18)は3.3～3.5ポイントであり、前年度よりもポイント低下した。一部の設備、事務対応に対する不満があることが、自由記述コメントからもわかる。大学祭等の行事(19)は3.3ポイントで前年度の3.1ポイントよりも0.2ポイント向上している。

合計は3.6ポイントで、工学部、大学全体の3.6ポイントと同じであった。

### [C] 総合評価

総合評価は7.2ポイントであり、これらは工学部の7.1ポイント、大学全体7.0ポイントよりやや高い。自由記述欄から、卒論・研究室での教育二関する満足度が高いことがうかがえる。特に卒業研究・研究室に対する好意的なコメントが目立っていることから、各教員の丁寧な指導が高いポイントの要因となっていると考えている。

## 3. 満足度向上のための対策

現在、以下の3点について対策を検討している。

### 3.1. 授業カリキュラムの改革

すでに専門科目については、より魅力的で学生の将来の目標が明確になるようなカリキュラムの構築をめざし、「食品衛生」、「住環境設計」を新しい柱として改訂作業を進めている<sup>[1]</sup>。食品衛生に関しては、2019年5月に食品衛生管理者および食品衛生監視員の養成施設として認定され、学生の将来が見える・将来に役立つカリキュラムの準備が整いつつある。2020年度入学者からは、所定の単位を取得すれば上記資格が得られる学科となる。

本満足度調査においても総合科目のポイントが比較的低い傾向にある。総合科目のカリキュラムについても、2020年度からの全学的な新カリキュラム策定・改革が進められており、満足度においても改善が見込める。

### 3.2. リーダーシップの養成

昨年度からリーダーシップ(9)を養成するための施策を進めている。昨年度に引き続き施策を発展させており、短期間ではあるが、現在までにある程度の成果が得られている。

#### <グループワークにおける新しい試み(案)<sup>[2][3]</sup>>

新入生には友達を作ることが苦手な学生がいる一方で、逆にコミュニケーション能力に秀で、面倒見のよい学生もいる。そこで、環境科学科で毎年行っている1年生の合宿研修や実験科目等でグループワークを実施する場合に、そのグループのリーダーを決め、そのリーダーが自然とグループワークを主導するような形を作った。これによって、友達がいけないなどの理由からレポートが書けない学生もフォロー

一されるように促せ、離学者対策にもなると考えた。

まず、G担任ごとに講義を行うキャリア入門にて各グループのリーダー・副リーダーを決めた。リーダーは立候補制としてリーダーになりたい学生を優先した。様々な連絡や人数確認などリーダーたちを通じて行った。実際に、合宿研修ではリーダーたちが活躍する場が多く、かれらを通じて学生達が協力し合いながらイベントを進める姿が目立った。

また、1年生の学生実験科目である生活化学実験にて、実験科目班のリーダーを決めた。上記グループのリーダーと変えたのは、実験が上手い・得意な学生がより成長できるよう「実験科目に関しては自信がある」学生も伸ばすためである。実際に、実験のTAの補助的な役割をしながら協力して実験を行う姿が目につく。また、例年よりも学生同士の助け合いが顕著であると考えている。こちらに関しては、まだ授業期間中であるが効果は出ていると考えている。この施策を高学年、および、他の科目にも広げることで、リーダーシップをとれる学生を増やしていき、学生が実感できるところまで進めていきたい。

### 3.3. プロジェクト等の活性化<sup>[1,4]</sup>

大学祭等の行事(19)のポイントが比較的低く、昨年よりは改善したものの依然低い状況である。当学科では、「ベリーベリープロジェクト」、「カフェラボプロジェクト」、「電池プロジェクト」などのプロジェクト型教育を推進する一方で、「地域連携プロジェクト/ボランティア入門」等の総合科目(キャリア形成群)を通じて、大学祭等と同様なイベントに関わることができるように積極的に勧めている。引き続き、このような活動を活性化させるように努力する。

#### 参考資料

[1]中田亮生・齊藤安貴子:環境科学科の取り組み事例紹介、2017年12月20日、全学教授会にて発表(本学四条畷キャンパス)。

[2]2019年度+学外教育研修プログラム実施報告書(U学科)、2019年6月10日学事課に提出 非公開資料)

[3]中田亮生:環境科学科の離学者に関する検討と対策、2018年7月9日付で学生課に提出(非公開資料)。

[4]中田亮生・齊尾恭子:アクティブ・ラーニング型新設科目「地域連携ボランティア入門」の充実、2018年6月14日、2018年度教育開発推進センター主催FD+SD研修会開催FD+SD研修会にて発表(本学寝屋川キャンパス)。

# 2018 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 18 日

情報通信工学部 情報工学科

主任 竹内 和広

## 1. 総合的評価の結果について

2018 年度卒業生満足度の総合的評価（項目[C]）は 10 段階の主観評価において平均評価値が 6.9 となる結果となった。これは 2016 年度の平均 7.2 から、2017 年度に平均 6.7 へと 0.5 低下した（2015 年度は平均 7.1）ことに比して、回復傾向にあると考える。その傾向を踏まえて、現行の学科教育の課題と改善方針を卒業生満足度調査の結果に基づいて検討した。

## 2. 知識・能力の獲得について

質問項目[A]群の「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか」に関する回答は、2015 年度、2016 年度、2017 年度に続き 2018 年度も一貫して平均 3.3 という結果になり、大きな変化はない。このように、卒業生の本学科での学びに関する評価の傾向は大きくは変化していないと言える。

具体的な評価の傾向は、自由記述の回答に多くみられ、特に卒業研究に関係する肯定的な記述が目立つ。例えば、実践的な問題解決能力、および知的生産活動に不可欠な口頭発表・文章構成の能力が身に付いたことを自己評価として挙げている。これは、指導教員が卒業研究生の研究進捗状況を定期的に報告させつつ適切な助言を与えて議論・検討の機会を設けるほか、中間発表会など本格的な研究発表の訓練の場を複数回設定し、短・中期的なプロジェクト実施を体験する。卒業研究の総決算となる、最終的な学科全体の卒業研究発表会の予稿や口頭発表の準備、卒業論文の執筆に関しても、短・中期的なプロジェクト実施指導と整合する形で、発表練習・添削指導を多数にわたり綿密に指導する。そのような指導が有効に機能している結果が肯定的な回答につながっていると考える。

他方、質問項目[A]群中の、2017 年度には、平均評価値が 2016 年度から 0.2 向上し、3.8 と上昇傾向がみられた「A-5 他人と協調して物事に取り組む力」の質問項目が、2016 年度と同じ 3.6 に戻ってしまった。そのような協調能力は、C プログラミング入門演習、コンピュータ工学、情報キャリア入門等の初年次科目で、友達同士で分からないところを教え合い・議論する学びの形を醸成する教育を実施することについて検討・改善の継続が必要である。

質問項目[A]群の中で、平均評価値が 3 未満であったのは、「7a. 国際的な視野（専門分野）」「7b. 国際的な視野（異文化理解）」「7c. 国際的な視野（国際交流）」である。しかし、それぞれの項目の平均評価値は 2017 年度よりも 0.2 以上上昇しており（7a 項目 2.6→2.8, 7b 項目 2.4→2.6, 7c 項目 2.3→2.6）であり、今後も継続的に改善していきたい。

## 3. 授業科目群や教育設備・機器などの評価について

質問項目[B]群の「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください」に関する回答は、小計区分 B1～B7、B8～B14、B15～B19 について、それぞれの平均が 2017 年度の(3.5、3.5、3.2)から 2018 年度には(3.5、3.6、3.3)と減少した区分は存在せず、

評価傾向に大きな変化はない。

それぞれの区分に関して検討を行うと、カリキュラムに関わる回答項目 B1～B7 では、対 2017 年度の調査に対して 2018 年度の調査で平均評価値が低下した項目は存在しない。しかし、2016 年度調査から 2017 年度で平均評価値が低下した「B4 基礎専門科目・専門科目(講義)」(2016 年度 3.8→2017 年度 3.6)は、2018 年度の調査でもひきつづいて 3.6 の値となってしまう。また「B7 教職科目」(2016 年度 3.5→2017 年度 3.3)も、同様の傾向を持ち 2018 年の平均評価値は 3.3 である。それに対して、「B5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」および「B6 卒業研究やゼミにおける指導」の評価は 2017 年度の評価から回復傾向が見られ、特に B5 および B6 の両項目とも、評価値が 4 あるいは 5 とした回答者が全体の半数以上を占めていることから、卒業生から高い満足度を示す評価を得ていることが確認できる。

B4 項目も評価値を 4 あるいは 5 とした回答者は 70 名で全回答者 126 名中の半数以上を占めているものの、上記のように平均評価値が 2017 年度に引き続いて 3.6 の平均評価に留まっている理由を自由記述の回答から分析してみると、自由記述の回答項目「E あなたが本学で改善すべきと思う点を書いてください」に、次のような回答が見受けられた。

「最初の必修科目である C プロでつまづく人がいると思うので、しっかりバックアップできるものがあれば良いと思う。」

「実力が違う人が多いので、実力別で分けた方がよい」

このような回答から、本学科の幅広い学力分布の平均的な層に焦点を合わせた講義科目は、特に成績優秀者から見て不満が残ることが見て取れる。実際、B4 項目の評価値 5 の獲得は、全評価値中の 10.3% に留まり (B5 項目 21.4%, B6 項目 40.5%)、成績上位層の満足度が十分に得られていないことが裏付けられる。B5 項目の実験や B6 項目の卒業研究の評価値 5 回答の獲得の多さや、自由記述の回答における、実験や卒業研究に関しては「苦労したものの結果的に良かった」とする肯定的な記述が多数であることを鑑みても、成績下位層の理解と単位取得を担保しつつも成績上位者の満足度を高めていくことが学科教育の課題であると考えられる。

質問項目 [B] 群の中で、最低の平均評価値である 3.1 であったのは、「B3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)」、「B18 留学制度」、「B19 大学祭等の行事」である。B3 項目については、B4 項目と同じく講義科目に対する幅広い本学科学生の学力層の分布に対する対応と同質の問題が関与していると考えられる。B18 項目に関しては、本学科学生の国際的な視野に対する視野の変化への対応が必要であると考えられる。B19 項目に関しては、大学祭等の大学で主催するイベントに対する本学科学生の認識が課題であると考えている。

また、従来 2017 年度までの調査では、事務サービスへの不満が多かったが、それについては質問項目 B 群の回答において、平均評価において変化なし、あるいは、若干向上という結果が得られており、悪化はしていない。しかし、自由記述回答の中には、依然として情報伝達や事務サービスに対するネガティブな記述が多い。現在、全学的に導入された統合的な情報連絡・管理システムである OECU MyPage が、事務サービス部門・教員から学生への情報伝達手段の中心として活用されている。しかし、当該システムの使い勝手の悪さや非柔軟性から、運用側と使い手側との不整合が以前から指摘されており、近年の

高度に利便性の増した情報システムに慣れ親しんだ学生には、不満を示す自由記述回答として指摘しやすいものとなっている。しかし、システムそのものの改善も課題であるものの、一方的にサービス提供者やそのシステムに対して不満を示す傾向は、SNS や Web 上の評価サイトでも散見される、軽率な評価行動の風潮に合致するものであり、共同体におけるコミュニケーションに対する本学科学生の認識と意識が十分に成熟していない可能性がある。システムの運用体制の整備および教育が必要であると同様に、自律的な活動の源泉となる共同体におけるコミュニケーションのありかたや必要な力についての教育が課題である。

#### 4. 現行の学科教育の課題と改善方針

本学科では 2017 年度より、教育カリキュラムに対する問題を精査し、2020 年 4 月からのカリキュラム改定を行うため、学科内にカリキュラム検討 WG を設置し、学科内の教育的課題について調査分析・検討を行ってきた。今回の 2018 年度卒業生の満足度調査の傾向も、当該 WG の調査・分析にほぼ沿うものであり、この満足度調査の結果は学科学生の実情と整合するととらえている。

同時に、同 WG の検討で得られた課題は、現行のカリキュラムでも実施可能な点から、漸進的に改善を行っている。例えば、初年次教育の講義形式の授業においては、授業内容を極度に難しくあるいは易しくなり過ぎないように配慮し、成績分布を適度な範囲に収めるとともに、学生の学習意欲・成長意欲や達成感を助長し、自律的学習習慣を涵養するように努めている。今回の 2018 年度卒業生の満足度調査結果を踏まえ、新カリキュラムにおいて、より成績優秀者に対する満足度を向上させる仕組みを確立していきたい。また、総合科目(英語科目以外の外国語科目)の改善については、担当する部署との連絡・連携を密にし、幅広い学力層に対応する教育施策を検討・実施していきたい。

質問項目[A]群の 7a, 7b, 7c 項目や質問項目[B]群の B18 項目の回答にみられるように、本学科学生の国際的視野も、近年の国際環境・社会構造の変化に伴って、多様ではあるものの、肯定的かつ積極的な方向に変化していることが見受けられる。このような変化に対応すべく、学部生の卒業研究を国際会議で発表させる、海外の学生を招いた研究イベントを本学で実施するなど、留学だけではない様々な方向性から学びの中に国際的要素を取り入れていくことを行っていきたい。

大学で開催される大学祭等のイベントについては、大規模大学の盛大なそれと比較すれば、本学のイベントが一見見劣りすることは否めない。しかし、大学におけるイベントは学生が主体となって捉えることが重要である。本学科学生は、大学でのイベントを、与えられる商業イベントととらえ、消費者的観点で評価を下しているように思われる。そのような意識ではなく、自律的にイベントを企画・運営・協力・参加する意識を持たせることが課題である。この課題は、本学科学生の共同体におけるコミュニケーションに対する認識が問題の核にあり、実習・実験科目、キャリア形成に関係する科目で、初年次から一貫した志向の基に学生を教育していく必要があり、新カリキュラムではその点にも留意して、実習・実験科目を改変/改善していく予定である。

以上のような改善方針を漸進的に具現化していくことにより、多様化する社会からのニーズに対して、情報工学科のディプロマポリシーである、「情報を扱う基盤的かつ横断的な知識と技術を身に着け、多様な分野に応用展開できる」卒業生を今後も継続的に育成していくことを目指し、卒業生の自己評価を高めることに貢献したい。

# 2018年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019年7月12日

情報通信工学部 通信工学科

2018年度主任 前川 泰之

## 1. [A] 本学での大学生活をとおして獲得した知識や能力に関する回答について

この質問項目では、1 幅広い分野にわたる教養、2 専門的な知識・技能、3 物事を論理的に考える力、4 的確な判断力、5 自ら課題を見つけそれに取り組む力、6 困難に直面してもそれに対処していく力、7a. 国際的な視野（専門分野）、7b. 国際的な視野（異文化理解）、7c. 国際的な視野（国際交流）、8 コミュニケーション能力、9 リーダーシップ、10 他人と協調して物事に取り組む力、以上10の内容が問われていたが、全体の満足度は3.3であり、昨年度の3.5を0.2ポイント下回る結果となった。項目別に見てもどの項目においてもやはり0.1～0.3ポイント程度下回っており、特に7a～7cの国際的な視野ではいずれも0.4ポイント下回る結果となっている。

この様に全体的に満足度が下がるという結果は、学生の受け取り方や学生自体の学力レベルおよび学習到達度の問題も考えられるが、やはり教育する側においてもこの結果を真摯に受け止めて、それぞれの項目についての指導内容の改善に次年度以降努めていく必要があると考えられる。つまり最近の学生、特に新生は書物や文字・数式等よりも、むしろスマホに代表される映像や動画情報から知識を得ることが多くなっている様であり、従来の印刷物や板書に頼った知識伝達のための授業方式では限界があるように思われる。具体的には、1と2の項目ではさらに身近な事例を含めた丁寧な説明、3～6の項目ではただ単に知識を伝達するだけでなく、演習や課題を与えて学生が主体的に取り組める授業の方式等の工夫が必要と考えられる。また、7の国際的視野について満足度の減少が大きいため、学部教育でも大学院と同様に英語の論文や国際学会等の経験を与えることや、今後留学生の受け入れや卒業研究やゼミナールでの英語の文献等の活用に努める必要があると言える。8～10に関しては、既に2019年度から取り組み始めているように、グループワークや課外活動等に関心を持たせるようなキャリア教育科目のさらなる充実が必要と考えられる。

## 2. [B] 本学での生活を振り返っての授業科目群や教育設備・機器の評価に関する回答について

この質問項目では、全般的には満足度の合計は3.6で昨年と変化がない。ただし授業科目群での小計は昨年の3.7から3.6に0.1ポイント減少しており、総合科目の外国語以外と英語科目では0.3ポイント、卒業研究やゼミにおける指導では0.1ポイント満足度が昨年より下がる結果となっている。今後低学年次における指導をさらに丁寧に行う必要があると言える。また学科に関係する卒業研究やゼミに関しては0.1ポイント減少したものの3.9と依然高い値を示しているが、学生一人一人に個別に指導できる唯一の機会であるので、より丁寧に個別指導を行ってさらなる高得点を目指すべきである。

教育設備・機器の評価では、講義室等の環境(空調・証明等)では3.8と昨年より0.2ポイント上昇しているが、講義室等のビデオ・教材提示装置や授業用実験室の設備・機器では3.5と3.7ポイントと昨年より0.2ポイント逆に下降しており、これらの設備や機器のさらに充実した活用と教材提示の工夫が必要と言える。具体的には従来の板書と口述による説明の他に、プロジェクタを用いて印刷物を適宜映写を行ったり、PCによるパワーポイントや動画も積極的に映写を行い、よりビジュアルで魅力的な指導を行う必要がある。

また、各種事務サービスの評価は昨年とほとんど変わりはなく、留学制度の評価が3.2と昨年より0.2ポイ

ント低いが、おそらく希望者が少ないことによる誤差も考えられ、今後さらに利用者を増やす必要がある。

### 3. [C] 本学で経験した教育についての全体に対する総合評価に関する回答について

総合評価は6.8で昨年の7.0より0.2ポイント減少しているが、1.[A]の項目で満足度のポイントの減少が少しあったことが影響していると考えられる。個々の対応策については既に1と2で述べた。

### 4. [E] 自由回答のなかの教育改善につながる意見とそれに対する改善方針

- ・「ノートを写す作業になっている授業があり、話を聞いているひまがない」、「黒板の字が読みにくい」、「黒板の文字が見にくいときがある」等

1でも述べた様に、板書のみによる授業では最近の学生に対して不十分と思われ、プロジェクタ等の利用が今後不可欠と考えられる。

- ・「重要な情報がしっかり送られてこない」、「情報が掲示板だけの告知が多い」、「重要な連絡がメールで書いたりしているのがわかりにくい」、「情報伝達が遅い」、「連絡が不十分な部分があった」等

従来、学科からの連絡はA号館ロビーの掲示板のみで行い、個々の授業では各教員が口頭で行っていたため、すべての学生に大事な情報（就職活動や卒研の配属等）が必ずしも伝わらないことがあったので、今後はOECUメールをはじめ、今年から学科で導入したSlack等のスマホのアプリにより、学生への情報伝達の徹底を図りたい。

添付資料なし。



## 2018年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019年7月8日

金融経済学部 資産運用学科

2018年度主任 袖山 則宏

2018年度卒業生（2015年入学）については、2017年度卒業生（2014年入学）に比して卒業生満足度が0.4ポイント上昇している。

前年度は1ポイント低下していたため、これについては有意な変化と理解し、まずは2017年度の原因の考察を行なっている。但し、2017年度の教員の変更の影響は人数の面からも小さく、学生の多くが3年生までに殆どの授業を受け終わっていること、また、専門ゼミⅡ（4年生ゼミ）は従前の教員が担当したことを考慮すれば、教員構成が与える影響は少なかったと判断される。

一方で、学生構成は2014年入学から大きく変化してきた。2014年から志望外入学（まわし）が始まり、2013年までは一応は金融経済学を意識した学生が入学してきたが、2014年からは金融経済を全く意識していなかった学生が増える傾向にあったのである。それゆえ、2014年入学生では約40%が志望外入学生であったことにより、数学などの理系科目は比較的よく出来る学生が増加したが、授業への反応の希薄な学生が増えたという金融を担当する教員もおり、金融経済に興味を持ってないまま卒業した学生が増加したことが、卒業生満足度が低下した大きな原因と考え方を整理した。加えて、2017年度卒業（2014年入学）は志望外入学の初年度で、教員もその変化に対応できなかったとも考えられた。

それに対して、2018年度の卒業生の満足度の向上は、なによりも志望外入学者が、前年度の約40%から約33%に低下したことが大きく寄与したことが考えられる。学生自体の人数は今後縮小傾向にあるが、各教員と事務局が連携を強めることに努め、学生の多様な興味に対応して満足度を他学部に劣らないレベルまでに引き上げたい。

## 2018年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019年6月11日

医療福祉工学部 医療福祉工学科

2018年度主任 藤川 智彦

### 1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

教育目標は、カリキュラム・ポリシーの通り、高度化・多様化する医療技術に対応できる人間力と基礎的知識・技術力について教授研究し、医療・福祉機器の開発や医療現場において活躍できる総合医療エンジニアと高度技術に対応できる臨床工学技士を育成するために工学と医学の基礎を十分に学習させることにある。具体的には、医用工学系について ME1 種および ME 2 種実力検定試験、医療機器情報コミュニケーター MDIC、臨床工学技士国家試験に合格させる。

### 2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

- 1) 専門科目の授業改善プランを提示し、学習環境改善を図った。
- 2) 1, 2 学年に対して計 5 回（うち、1 回は予備試験）統一問題による実力試験をおこない、成績優秀者を表彰して学生のモチベーション向上を図った。その結果、基礎工学分野ではのべ 47 名、医用工学分野ではのべ 23 名、基礎医学分野ではのべ 108 名の 60% 以上得点者を出した。これは、e-learning の学習時間も大きく関連しており、その後の学習過程にも大きく影響するものであると考えている。
- 3) 第 2 種 ME 技術実力検定試験合格者は 1 年次 1 名、2 年次 2 名、3 年次 2 名、4 年次 4 名の計 9 名であった。
- 4) 医療機器情報コミュニケーター MDIC 合格者は 3 年次 1 名、4 年次 6 名の計 7 名であった。
- 5) 臨床工学技士国家試験合格率は 90.3%（全国平均 77.5%）、28 名の合格者を輩出した。なお、合格率は学科開設以来全国平均を上回っている。
- 6) 第 1 種 ME 技術実力検定試験合格者は 3 年次 1 名、4 年次 2 名の計 3 名であった。

### 3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

一昨年度以来、教務委員および臨床実習担当教員、さらに、卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導につとめ、「履修の取りこぼし」防止をおこない、学生自身が国家試験受験資格に必要な科目の履修状況が確認できるような資料を用いて、学生自らが学修状態を把握、管理できるように務めている。また、本学科独自で展開している学生証を用いた来学確認システムにより、事務局との密な連携によって、連続 5 日間の欠席学生を抽出し、離学に至るプロセスを解析できるデータを収集した。なお、対象学生はグループ担任による個別の対応だけでなく、学科独自の学生担当教員を配置し、早期の学生相談に対応している。現在、来学しない学生の把握もできており、離学者の減少に大きく貢献している。今後もこのシステムを活用していく予定である。また、就職指導においても、卒業研究の指導教員が研究室配属学生の状況を把握し、学生自身がしっかりとした進路を見つけられるように、指導教員が積極的に関与し、学生との密接な関係が構築できるように努めている。

#### 4. 卒業研究指導について

本学科では研究室配属の前に「キャリアデザイン」の科目を設け、卒業研究や技術系社会人として必要な基本的スキルを身につけさせている。これによって、視野を広くさせ、学生自身の将来の選択肢を多くさせる工夫をおこなっている。なお、卒業研究配属に必要な研究室訪問もこの授業内でおこない、訪問学生に対して教員または先輩たちが個別に対応するようにしている。卒業研究は3年生後期における「プレゼミ」による事前指導を経て、4年生前期末の中間報告、後期中期末の概要提出と口頭試験、後期末の論文提出のすべてを満たす必要がある。内容は生体医工学・福祉工学の各関連分野における調査・実験系の研究である。2018年度は学科会議で個々の学生の状況を確認し、学科全体で卒業研究の質の維持に努めた。この結果、本学科所属教員の研究室における卒業研究不合格者は0名であった。なお、これからも学科内で情報を共有し、学生のケアを怠らないよう務める。

#### 5. 卒業・修了生満足度調査結果について

##### 1) 総合評価に関する分析

教務委員および実習担当教員、さらに、卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導をおこなった結果、個々の学生状況を把握しやすくなり、2018年度の経験した教育の総合評価（10段階）は昨年度の6.9より0.4上昇し、7.3となったと推察できる。

##### 2) 専門分野と獲得した能力に関する分析

例年通り、臨床工学技士の国家資格取得に向けた適切な授業をおこなっているため、専門知識・能力獲得度は従来とほぼ同じ結果を得た。ただし、医療従事者である臨床工学技士の国家資格取得の軸があるため、国際的な視野は低く、リーダーシップに関しても課題が多いと推察できる。しかし、医療従事者としてのリーダーシップは学生の個性を見極めて対応する必要があるため、教育成果として現れるには時間を要すると考えられる。なお、国際的な視野の養成は現状の教育方針に沿った環境構築を引き続き学科内で検討する。

##### 3) 授業科目および卒業研究に関する分析

卒業研究指導教員またはグループ担任からの学生状況を会議等で共通認識することにより、個々の担当者だけでなく、学科教員全体でサポートできる体制を構築しているため、専門教育の実習および卒業研究の満足度評価（5段階）は例年通り極めて高く、4.0と4.2であったと推察できる。ただし、総合科目は3.4前後であるため、今後は総合科目と専門科目のスムーズな連携を考慮したカリキュラムの検討が必要であると考えている。

##### 4) 自由記述に関する分析

自由記述における内容に、〇〇先生のわかりやすい授業や丁寧な授業、臨床工学技士の役に立った、適切な指導をいただいたなど、個々の専任教員の授業における良いコメントや評価が多くあり、各教員がそれぞれの授業において、臨床工学技士の育成における重要性を意識した授業改善をおこなっていることが窺える。また、研究室が充実していたや雰囲気がとても良かったなどの記述もあり、卒業研究を通して、各教員が研究室の学生と信頼関係を構築していることも推察できる。

#### 5) 教育設備に関する分析

四條畷キャンパス全体の問題と考えられるが、いわゆるアメニティ施設や行事が寝屋川キャンパスと比較して乏しいことが窺えるため、学生の不満を解消させるハードウェアの整備が必要であると考えられる。

#### 6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

技術者としての必修であるドキュメンテーション能力の基礎を教授するために、1年次で「アカデミックライティング」を開講しており、図表の記述、参考文献の提示などの基本的な知識を低学年時から徹底させる試みをおこない、2年次の「電気電子工学実験」により、学生自身で経験した実験の報告書の作成をおこない、さらに、3年次の「キャリアデザイン」の開講により、幅広い分野の知識に得て、4年次の「卒業研究」の中で、プレゼンテーションや卒業論文の作成を可能にするスキル身につくように、学年の進行に伴い、学生自身でスキルアップできるようにしている。また、3年次の「生体機能代行医用機器学実習」や4年次の「生体機能代行装置学実習」では、学生自身が興味のある部分を中心に事前に調査(グループワーク)し、その結果をプレゼンすることで積極性を獲得させるとともに、外部講師がその結果から学生の知識レベル情報を得て、実習に役立てる、教える側、教わる側に双方メリットが有るアクティブラーニングを取り入れている。これより、学生自ら興味がある部分に積極的に関わることで、授業への意欲が飛躍的に向上する結果があったと思われる。また、3年次の「ヒト型ロボット創造製作実習」では、金属加工から部品を作成し、学生の集団が自ら発案した二足歩行ロボットを製作するなど、実習・演習科目群は学生の自主性を重んじるよう心がけている。さらに、学生中心で心電図読図の勉強会を開催し、高学年の学生が低学年に教える指導をおこなっている。これについては、病院において即戦力として機能する能力であると期待されている。同時に、先輩・後輩の関係を学ぶ人間形成にも役立っている。企業・病院に就職した卒業生が実習補助員として授業に参加し、学生(後輩)に授業内容はもちろん、社会人としての心構えや実体験なども伝え、学生から大変好評を得ている。

#### 7. 添付資料(あれば)

特になし。

## 2018年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019年6月21日

医療福祉工学部 理学療法学科

2018年度主任 小柳磨毅

### 1. 総合評価

2018年度卒業生満足度調査結果の総合評価は7.8であり、昨年度(2017年度)から0.1ポイント改善した。以下に質問項目[A][B]と自由記載項目の分析結果を示す。

### 2. 質問項目 [A]

[A]本学での大学生活と知識や能力の獲得に関しては、平均評価が3.6を示し、昨年度(3.5)よりも0.1ポイント向上した。国際的な視野(特に異文化理解や国際交流)の項目については3.0未満ではあるが、昨年度(3.5)よりも0.3~0.4ポイント向上した。今後、4年間の学生生活の中で、卒業後の活動にもつながる国際的な情報交流が持てる機会を検討していきたい。一方、幅広い分野にわたる教養や専門的知識・技能、論理的に考える力、困難に直面してもそれに対処している力、コミュニケーション能力や他者と協調して物事に取り組む力の項目は、3.8以上の高評価となっており、今後も継続して更なる向上を目指していきたい。

### 3. 質問項目 [B]

[B]授業科目や教育設備・機器についてみると、平均評価が3.7を示し、昨年度(3.6)よりも0.1ポイント向上した。総合科目が3.3~3.4であったのに対し、基礎専門科目・専門科目の講義は4.0、演習が4.2、卒業研究・ゼミなどの指導は4.3の高評価であった。理学療法学科では習得できない教職科目は、評価の対象外となるが、授業科目の小計は3.8を示し、昨年度(3.7)よりも0.1ポイント向上した。図書館等の設備関係の小計は3.7を示し、昨年度(3.6)よりも0.1ポイント向上した。シラバスや事務サービス等の小計は3.5を示し、昨年度(3.4)よりも0.1ポイント向上した。

### 4. 自由記載項目

本学でよかったと思う点については、早期(2年生)からのゼミ配属や、同期だけでなく先輩、後輩とのつながりの深さ、教員との距離が近く、親身な指導がよいという意見が多かった。グループワークが多く、コミュニケーション能力が身についたとの意見もあった。今後も、学生の立場に立った細やかな指導を継続していきたい。一方、改善すべき点は、交通の便(特にバスに関わる内容)や空調やシャワー設備に関わる意見が多かった。

役だった授業科目名は、解剖学、生理学、運動学などの専門基礎科目を挙げた卒業生が多かった。また丁寧な国家試験対策や臨床的な講義や実習を実施した教員の評価が高かった。今後のカリキュラム変更時に、よりわかりやすく習得しやすい設定をしていきたい。その他、国家試験対策において、多様な学生の学習意欲や集中力を促していくための取り組みは、今後さらに創意工夫を積み重ねていく必要があると考えられた。

大学への要望等の自由記載では、キャンパス内の掃除が行き届いていたことや、自然環境に恵まれていたとの感想があった。また学内だけではなく、学外での学会等の情報が多く、参加が可能であったことも評価が高かった。

以上

## 2018 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 2 日

医療福祉工学部 健康スポーツ科学科

2018 年度主任 山下 陽一郎

### [A] 大学生活をとおして得られた知識や能力に関する質問。

他人と強調して物事に取り組む力(3.9)、専門的な知識・技能、的確な判断力(3.8)は昨年度と同様に高値を示し、専門性を生かした問題解決能力に成長の感触を得ているようである。しかし、国際的な視野(専門分野)、(異文化理解)、(国際交流)の3項目は昨年度に引き続き3.0~3.1であり、多くのスポーツ選手が国際的に活躍している情報を的確に受け取り、スポーツの世界における国際的な動きを理解すること、およびそこから得られる情報の展開についてのトレーニングが不足している可能性がある。この点に関しては、教員の関与が学生に与える影響が大きいと考えられるため、日々の講義や実習・実技の中で社会性を高め、国際感覚を研ぎ澄ますような刺激を提供していくことが求められる。

### [B] 授業科目群や教育設備・機器などに関する評価。

卒業研究やゼミにおける指導(4.1)と高い評価を示している。ゼミ活動や卒業研究は大学生活の集大成であり、教員の熱の入れ方も特別熱いものがあり、そのことが学生諸氏に伝わったと思われる。また、教職科目(3.8)の評価については、希望者のみが教職科目を履修しているためこのような高い評価になったと考えられる。学生の高いモチベーションと教員の教職希望者に対する適切な指導が行われた結果であると考えられる。これらに対して、大学祭等の行事(3.3)となっている。学祭自体が寝屋川キャンパス中心であること、運動部所属の学生は秋のリーグ戦の日程と重なることがあることなどを考慮すると、当学科の学生の関与があまりなくこのような評価になっていると思う。

### [C] 総合評価

総合評価は10段階で6.9と昨年度の6.8を0.1ポイント上回っているが、今後はこれをさらに向上させ、学生の満足度を高いレベルに持ち上げていく取り組みをしていきたい。このために、講義科目や実習・実技科目などの教育面の充実を図りつつ、教員各自が学生との密接な関係を構築し学生の要望に答えていけるよう、教員同士が良好な関係を保ち連携していく努力が必要であると思われる。

### [D] 本学で良かった点

教員や事務職の方たちの助力を実感し感謝していた。また、部活動やゼミ活動を通じた学生間の出会いを有意義であったとする評価が多く見られた。専門的な学問分野の教授についても丁寧な指導がなされていたことが窺える評価が示されていた。

### [E] 改善すべき点

授業に関して、難易度を高くすることの要望、総合科目等の必要性に関する疑問が示された。また、学内の情報伝達システムの不備や教職対策の不足に関して改善希望が示された。また、学生食堂のメニューや量の見直し要望が示された。設備的には、空調を含めた施設の整備や老朽化に対する改善

希望があった。その他では、学名変更、立地条件の見直し、交通アクセスの不便さなどがあった。

[F] 役に立った科目名等

生理学、運動生理学、生体計測学実習、運動生理学実習、教育実習、健康運動実践指導演習などの講義・実習等に加えて、ソフトボール、テニス、スキー・スノーボード等の実技科目が挙げられていた。

[G] 大学への要望、提案

以下のように要望が示されていた。

- ・他学科との交流が少なかった。
- ・駐輪場を12号館近くにも設置してほしい。
- ・学生用駐車場の設置。
- ・体育会の組織強化。
- ・プールが無い。
- ・人工芝のグラウンド設置。
- ・通学に便利な土地に設置してほしい。
- ・売店を増やしてほしい。

## 2018年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019年 11月 28日修正

総合情報学部 デジタルアート・アニメーション学科

2018年度主任 寺山直哉

卒業生満足度調査における教育の全体を考慮した総合評価は7.7ポイントで、前年度の7.1ポイントから0.6ポイント増となった。想定要因としては、前年度の課題であったQ 学科教員による対象学生の内、1～4年次の各学生がW 学科 2015年度教育課程の210名体制となったことなどによる当該学生に対するサポート濃度の低下への反省と改善によるものと思われる。具体的には、QW両学科間の代替科目に関する制限など、学科移行期による設置科目的な問題に対する履修相談などの教務的サポートを始め、学科名称に対する思い入れなど、感傷的な部分に関するコミュニケーションフォローや、卒業後の進路などに対する相談等が考えられる。

個別の項目については、教育設備環境についてのB-8～14の小計平均評価が前年度の3.8から3.6へと低下していることが気にかかる。特にB-14については本学科大学院生の在籍数低下に起因するものと推察できるので、実質的な移行学科である新学科における大学院進学率向上の為、周知機会の増加や進学における経済的メリットなどの情報提供を中心に、学部指導教員による早期の進学指導を実施し始めている。

また、B-11,13についての数値低下、加えて自由回答の[E]における「OECUマイページのお知らせ等があまり活用されておらず」という改善要望の指摘については、教育設備や情報インフラ構築面での更新サイクルについても考慮する必要性を感じさせる。その点については、現在学内で進められている新しい学内情報インフラの整備に期待するとともに、そうした新しい教育環境をフルに活用しながらも適宜利用者である学生の利便性に関する声に真摯に耳を傾けた持続的な環境改善に取り組むことが重要だと考える。

尚、A-6の「困難に直面してもそれに対処していく力」が前年度の3.6から4.0へと大きく向上しているのが印象的であるが、これは留年も含め長期間に渡る在学生である本学科の生徒に対して、就職活動を始めたとした進路相談に関するサポートや適宜保護者も交えた担当教員による個別教育懇談などの手厚いフォローによる指導を継続的に実施してきた結果も含め、該当学生の成長が得られたのではないかと推察する。

また、従来から前年度比減となる傾向の強かったA-7.a.b.cについて、同bとcが0.1ポイントずつではあるが増となっていることは、過去の検討課題であった国際交流センターとの連携を中心とした相互理解や国際交流など多様なコミュニケーション環境の構築が好影響を与えていると推察する。

今後、そうした向上傾向にある項目についても更なる高評価を目指し、学科会議などで定期的に現状報告を行うなどして認識を共有し合い、適宜状況や環境に即した効果的な施策を行なっていきたいと考える。



## 2018 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 10 日

総合情報学部 デジタルゲーム学科

2018 年度主任 寺山直哉

卒業生満足度調査における教育全体を考慮した総合評価は 7.2 ポイントで、前年度の 7.0 ポイントから 0.2 ポイント増となった。2018 年度は 1～4 年次が 2015 年度教育課程の 210 名定員となり、卒業年次学生の卒業研究や卒業制作、進路指導などに対するサポートの濃度が好影響を与えたとも考えられる。

また、A-8,9 などコミュニケーションに関する知識や能力に対する数値が 0.2 ポイント以上増加しているなど、多様な人間関係や教育研究環境での評価向上については、新たにゲーム&メディア学科を加えたゲーム系2学科体制での様々な課外授業やプロジェクト実施体制による刺激や相乗効果もあったのではないかと推察する。

今後もこれに満足せず、ボトムアップやトップアップ的視点での施策を織り交ぜると共に、学生ポートフォリオをはじめとした各種 ICT ツールの活用を含めた業務の効率化も図りながら、一人ひとりの学生にしっかり目を向け、さらにはその情報を学科教員並びに教職員間全体で共有することが肝要であると認識している。

ただ、全ての調査項目において前年度を下回ったものがない中で、B-11,12,13 など、講義室等の空調や教材提示の装備、設備環境への評価数値については前年度から横ばいであり、自由記述のアンケートにも MC2 演習室の設備に関する改善要望が複数上がっているなど、キャンパスや教室自体における経年化に関する課題を抱えていると思われる。

一方で、従来から「A-7.a.b.c 国際的な視野」のポイントが、他の項目と比較して低い傾向が続いていたが、a.b.c において+0.3,+0.2,+0.3 ポイントと各項目共に増加している。これらは、前年度の課題にも上げていた、特別連携入試による中国からの留学生や、アムステル応用科学大学やユトレヒト芸術大学からの研究生受け入れなど、学科での国際交流に対し積極的に取り組んできた成果でもありと考えている。しかしながら、相対的な評価点数を見る限り、まだまだ学生の実感としてはそれほど高くないと思われるので、今後も留学生や研究生の受け入れゼミの枠を超えた、新たな働きかけが必要であるとも考えている。その一つとして、2018 年度学科専門科目である「多文化コミュニケーション」を 1 年次前期に配当していると共に、国際交流センターとも連携を図り、留学生や研究生との新たな関係性の構築に加え、留学生の質的審査や受け入れ側の教育環境の改善も必須であると認識している。

## 2018 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019 年 6 月 19 日

総合情報学部 情報学科

2018 年度主任 登尾 啓史

### 1. 卒業・修了生満足度調査結果について

数値による評価については、ほぼ昨年度と同程度である。また、不満の多くはバスに関することであり学科としては対策を取ることはできない。自由記述の良かった点に関する記述からも 3 年次の卒業研究、グループディスカッション、テクニカルプレゼンテーションなど就職活動に直結する科目は全体的には好意的な評価が得られている。今後もより多くの学生からより良い評価が得られる科目を増やしていくよう努力していく。

次節以降、教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバス、教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）、学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）、卒業研究指導、その他・特記事項（学科独自の教育、アクティブ・ラーニング、離学者対策など）など、添付資料の順で、本学科の詳細項目を解析する。

### 2. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

本学科では、以下の教育目標で理工系の情報教育を行っている。

- 情報通信技術 (ICT) の基盤となる専門知識の獲得
- 即戦力となり得る実践力の育成
- コミュニケーション能力

などを中心とした社会性の向上カリキュラム本学科のカリキュラムは、ACM（世界最大のコンピュータサイエンスの学会）が策定した標準カリキュラムに対応している。2005 年のメディアコンピュータシステム学科開設から、上述の教育目標に基づいてカリキュラムを設計し、2009 年度にカリキュラム改定をへて、本年度は、情報学科として更に改善したカリキュラムの実施を開始した。そのカリキュラムでは、特に IT キャリア科目の充実を図っている。JABEE コンピュータサイエンス教育プログラム（略称 CS コース）を設け、外部第三者評価である JABEE（日本技術者教育認定制度）の認定を継続することを目指し、教育の質やサービスの向上に努めている。なお、JABEE 認定を受けないコース（デジタルメディアコース、略称 DM コース）の学生に対しても、各科目における合格基準は同一にしている。2017 年度に JABEE の認定継続のための受審を受け、継続して認定することが認められた。シラバス本学科の専門科目のシラバスにおいては、「授業目標」「授業スケジュール」「合格基準」「評価項目」を必ず明示するようにしている。

### 3. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

本学科では、JABEE の認定を目指すべく、各教員が統一された方針で授業の質を高めることを心がけてきた。2009 年度から学科内に FD 担当教員を定め、FD 会議を開き、内容の点検を行っている。2013 年 4 月から本学科の「コンピュータサイエンス教育プログラム」が「情報および情報関連分野」の JABEE 適合プログラムとして継続認定された。そこで受けた改善勧告に対する対応を行い、さらなる教育改善を加えた 2017 年度からのカリキュラムを前年度策定した。新カリキュラムの点検は次年度に行う。成績評価 JABEE 基準により、成績の相対評価は行うことはできず、シラバスに明示した合格基準と評価項目に基づき絶対評価を行っている。その結果として、高年次の科目に合格率が低いものもあるが、近年の努力のおかげで学科の平均としては、科目合格率は高まりつつある。引き続き、合格率の数値目標を定め、合格率を改善することにした。

### 4. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

本学科では、履修指導年度末や年度初めに設けられた学科オリエンテーションの時間以外に、1 年生向けには「スタディスキル」、2 年生向けには「プレゼミ」の中で、学科の教育の方針や JABEE や履修のポイントについて説明を行っている。教育相談・生活相談グループ担任の方法にはこれまでに試行錯誤があったが、2009 年度からは、新入生を 8 グループに分けて、1 グループにつき主担任 1 名、副担任 1 名の教員が担当している（担任は 2 年ごとの持ち回り）。入学式直後の新入生オリエンテーションでは、2009 年度からアイスブレーキングを導入している。また、5 月 18、19 日に、例年通り学外研修を実施し、その中で学生全員とグループ担任との個人面談をしたり、学生同士や学生と教員が打ち解けるようなイベントをしたりした。1 年次の必修科目である「スタディスキル」においては、欠席が多い学生に対しては、担任から本人や家庭へ電話連絡するようにしている。就職指導情報学科では 1 年生向けにキャリア形成科目の役割を持っている「スタディスキル」を実施した。旧カリキュラムの 2 年生向けには科目「プレゼミ」の中で 4 回、キャリア形成のための授業を実施した。3 年生向けに学科独自の進路ガイダンスを 2 回開催した。初回は 4 年生で内定を既に得た学生の経験談、2 回目はこれからの就活についての説明に重点を置いている。また、後期科目「キャリアプランニング」の中で筆記試験対策、模擬試験を行っている。3 年生の 1 月からは、研究室単位で就職課を訪問し就職課担当者と懇親を深めグループで就職活動を行うシステムに変更した。就職課へ行っていない学生を捕捉するとともに面談を行い就職課へ行き就職活動を行うように指導している。

### 5. 卒業研究指導について

本学科では、3 年次で「卒業研究」を行っている。2 年次の 7 月に配属の研究室を決定し、2 年次の後期にプレゼミを行い、3 年次の年度初めから卒業研究を開始し、3 年次の年度末に終了する。卒業研究の合格を 4 年次への進級条件にしている。また、3 年次の月

～金曜日の 3、4 時限に卒業研究を割り当てており、原則としてこの時限に他の科目を受講することはできない。上述のような制度によって、学生に十分な時間をかけて能動的な学習を行わせ、問題解決能力、プログラミング能力、プレゼンテーション能力などを修得させる。これを 3 年次の年度末までに終えることによって、身に付けた能力を就職活動に役立てることも狙っている。学科の方針として、研究テーマは一人ずつ異なり、複数人で 1 テーマは認めていない。合格の基準として、学習・教育目標の達成に加えて、450 時間以上の従事、中間報告（口頭発表）2 回、20 ページ以上の論文、最終発表（口頭発表）、1000 行以上のプログラム（CS コースのみ）を定めている。論文と最終発表は複数の教員で評価を行い、可否を判定する。最終発表会では、各研究室から選抜された学生による優秀研究セッションを設けている。これらの学生は全教員で評価し、最優秀研究を選定する。上位の学生は、当該年度の学業優秀賞に推薦している。なお、研究をさらに続けたい学生や大学院進学予定者のために、4 年次配当の選択科目として「特別研究」を設けている。

## 6. その他・特記事項(学科独自の教育, アクティブ・ラーニング, 離学者対策など)など

本学科では、学科独自の教育学科開設の 2005 年度から毎年新入生に学科指定のノート PC を購入させている。このノート PC には、学科の授業に必要な各種のソフトウェアがあらかじめインストールされている。この PC を活用して、プログラミング能力やコンピュータ運用能力を向上させることを狙っている。また、後述の e-Learning を利用して、一般の授業にも役立っている。MC2 の協力を得て、ウェブベースの e-Learning の Moodle を学科として積極的に活用している。例年約 70 のコースが設けられており、一般の授業以外に、研究室単位のプレゼミや卒業研究の運用にも利用されている。「ACM 国際大学対抗プログラミングコンテスト」に出場する有志学生の課外活動を学科として支援している。アクティブ・ラーニング必修科目として卒業研究、コンピュータシステム演習を行っているのに加え、特別研究やグループプログラミング演習、エンジニアリングデザイン演習など、選択科目にもアクティブ・ラーニングを行う科目がある。これらの科目は、卒業生満足度調査でも良かった科目として挙げられており、学生に有意義に受け入れられていると判断できる。離学者対策離学者対策の一環として、今年度より事務と連携し休みがちな学生には本人 及び保護者に直ぐに連絡し、保護者が面談を希望した場合直ちにそれに応じるようにした。その結果 2017 年度から引き続き 2018 年度も離学率は 4%台となった。ここ数年における科目合格率の平均値上昇により、離学が減ってきたようである。

## 7. 添付資料

資料 1 情報学科ウェブページ <http://www.cs-oecu.jp/>

資料 2 JABEE プログラムへの取り組み状況  
<http://cs-oecu.jp/misc/oecu-t-fd>

## 2018年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019年7月15日

共通教育機構人間科学教育研究センター

2018年度主任 中里見 博

### (1) 総合科目への尺度評価部分について

総合科目の満足度について、①外国語以外は3.5(2017年度3.5、2016年度3.5)、②外国語科目(英語以外)は、3.3(同3.2、3.2)となっている。基礎専門科目・専門科目(講義)の満足度が3.8、同(実験・実習・演習など)が、3.9となっていることに比べると、今年度も総合科目の評価はやや低く、外国語科目はさらに低目であった。また人間科学教育研究センターが多くの科目を担当する教職科目については、3.5(同3.5、3.5)であった。

総合科目についての学生の授業アンケートでの総合評価では、近年多くの学部学科の総合評価平均を上回る結果が出ていることを考えると、総合科目の履修が1・2回生に集中しているため、その印象や評価が、卒業生満足度調査の実施時点では薄れてしまっているという問題も関係しているように思われる。

しかし、低調であるということは真摯に受け止める必要があるため、人間科学教育研究センターでは、学生の学習状況やニーズ、学科からの要請に等に応えられるよう、以下のような取り組みを行なっている。

#### ① 「日本語上達法」関連の科目の充実・強化

昨年度から、日本語上達法担当の常勤教員(特任)を採用し、その充実・強化を図っている。寝屋川キャンパスの新入生を対象とした国語プレイスメントテストを実施しているが、その結果を受けて、入学後のレポート作成に困難が生じると予想される学生を把握し、汎用的な日本語運用能力の向上を目的とした授業「日本語上達法1」を提供し、新入生のレポートに対する苦手意識の軽減と、基礎的な文章力の習得に向けた指導を行なっている。同授業は、本学学生の能力の底上げを目指すとともに、初年次生への導入教育をも担っている。

#### ② 課外学習支援活動の実施

昨年度後期から、大学での学び方として「読み方」「書き方」「聞き方」、「ノートテイキング法」を指導する課外学習支援活動を行なっている。専門分野において必要とされる基礎的な執筆ルール of 徹底、読み書きなどの一般的なスキル習得を指導することが大学全体で求められているため、その定着・向上を促すために授業外の時間で行なう自由参加型の少人数ミニ講座(名称:講義マスターへの道)を開催している。昨年度は寝屋川キャンパスのみだったが、今年度からは、寝屋川と四條畷の両キャンパスで、本格的に実施している。

#### ③ 学科との学習支援の連携強化

人間科学教育研究センターでは、4年次生で総合科目の単位が不足している学生をリストアップし、そのような学生が授業を受けている場合で、学習状況がよくない学生について、学科指導教員に連絡することを今年度から開始した。また、共通教育機構の3センターに各学科との連絡窓口となる教員を置き、主に1回生・2回生を対象とした学習状況等を共有し、学生への指導・支援にあたっている。

### (2) 自由記述について

総合科目についての記述は少ないが、積極的な評価として以下のものがあつた。日本語上達法で正しい

日本語を学べたなど;総合ゼミナールでコミュニケーション能力がついた;英語以外の外国語で他国に興味を持てた;総合科目の授業で視野や知識が広がった;スポーツ実習で体を動かしてよかった、など。日本語上達法に関する記述が複数みられた。

他方、改善を求める点では、体育館がないという指摘があった。新棟建設で改善が期待される。

## 2018年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019年7月5日

共通教育機構／英語教育研究センター

2018年度主任 上垣 公明

### ■総合科目（英語科目）評価点について

英語科目の2018年度の全学平均は3.5であり、前年度の3.4から0.1ポイント向上した。全学平均における0.1%の向上は、専任教員及び非常勤教員の日頃の取組みの成果であると思われる。英語教育研究センターは寝屋川、四條畷のキャンパスにまたがり多くの英語科目を管轄、担当している。学部、学科によって学生の習熟度や気質が異なるが、そのような状況において、各々に適した英語教育を行うことに努めている。

### ■自由記述欄について

アンケートの[F]項目（あなたにとってとくに役に立った、あるいは印象に残っている科目名と、どういう教育内容が役に立った、あるいは、印象に残ったこと、あるいは後輩へのお薦めの理由などをご記入下さい）において、英語科目に関するものとして下記のような回答があった。

否定的なコメントとして「英語がいらなかった」という記述があったが、それ以外は肯定的なものばかりであった。以下、科目ごと分けて、コメントを見ていく。

#### （1）コミュニケーション科目

「教員が親しみやすく、内容が入ってきやすかった」「力がついた感じがする」「英会話は人と話すことで楽しかったです」「ゲーム等で英語を学ぶことが出来たため英語を勉強することに苦手意識がなくなった」等。（最も多かったのが、特任教員のカルモナ先生のクラスについてのコメントであり、好評価が多く寄せられていた。）

#### （2）英語リーディング科目

「学習が楽しかった」「教科書のレベルが適切でスピードも適切」「テストやレポートなどが簡単だったから」「英語の基礎の部分から学ぶことができたところ」「ドラマを観賞しながら学習するのが楽しかった」「教科書に載っていることだけでなく、先生の余談が印象に残りました」「将来役に立つから」「教職員が分かりやすく教えてくれた」「様々な教育方が用意してあり、楽しく学べた」「理系大学でもしっかりと学べたこと」等。

#### （3）スキルアップセミナー

「英語のヒアリング能力が身についた」「自分のペースに合わせて勉強することができた点」等。

### まとめ

アンケートの自由記述のコメントから、本学のような理工系の大学においても、将来的な観点から英語の必要性を認識している学生が多くいることが見て取れた。英語教育研究センターとしては、今後ますます、ユニバーサルランゲージとしての英語のニーズが高まっていくことが予想されるなかで、そのような状況を踏まえて、学生の要望にしっかり応えられるよう、本学内・外のFDへの参加や日頃の教員間の情報交換を通して、本学における英語教育の更なる充実を図っていきたい。

# 2018年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2019年 7月 9日

共通教育機構 数理科学教育研究センター

2018年度主任(代理) 原田 融

## 1. 設問[A]について

ASセンターが主に関係する項目は1～4であると思われる。基礎専門科目として、数学と物理学の講義・演習と実験では重点を置いて教育している項目である。大学全体では「2 専門的な知識・技能」3.8、「3 物事を論理的に考える力」3.7 で共に昨年と変わらず、「4 的確な判断力」3.6 で0.1ポイント上昇している。[A]の平均値については3.5で0.1ポイントアップした。この質問項目からASセンターに関する満足度を判断することは難しいが、一定の評価を得ていると考えてよいだろう。学部ごとに見ると、工学部と医療福祉工学部は0.1ポイント上昇し、情報通信工学部は0.1ポイント下降している。工学部と医療福祉工学部では項目2～4において「4 的確な判断力」においてのみ0.1ポイント上昇している。このことはASセンターが進めている習熟度別の授業が成果を挙げていることに関連しているかも知れない。しかしながら、情報通信工学部では項目2～4のすべての項目でポイントを下げていることから、より学科と連携しながら、シラバスや授業内容での改善や工夫を重ねてゆく必要があるだろう。

## 2. 設問[B]について

ASセンターが関係する項目は4と5であり、大学全体では「4 基礎専門科目・専門科目（講義）」3.8、「5 基礎専門科目・専門科目（実験・実習・演習など）」3.9 と昨年度から0.1ポイント上昇している。[B]の平均が3.6であることから、良い評価を得ていると言える。工学部では4が0.1ポイント上昇、情報通信工学部では5が0.1ポイント上昇、医療福祉工学部では4が0.1ポイント下降している。上記で述べたように、より学科と連携しながら授業内容での改善や工夫に努めたい。

## 3. 自由記述について

直接ASセンターに関係する内容は限られているが、授業に関する具体的な意見が出されており、授業改善への指針として貴重なものであるといえる。

(1) 微分積分では「計算力がついた(E)」「計算の仕方を上手に教えてくれた(E)」「高校までの数学の復習することができた(E)」「数Ⅲを教わったことがなく、大学に入学したためとても不安に思っていたが、丁寧に分かりやすく授業をさせていただいて、落ちこぼれることなく単位取得ができた(N)」「話がとてもおもしろく、楽しく授業を受けれた(U)」などの声が寄せられた。線形代数については、意見は少ないが「1年生で、みんなと協力して学ぶ力がつく。友達を増やせる(F)」という一方で、「先生が理解してなかった(U)」などの声もあった。また、以前は多く寄せられていた「わからない」「難しすぎる」という学生の不満はほとんど見受けられないので、習熟度別クラスが効果的に機能していると判断できる。しかし、「数学の基礎的分野。定義があいまいな高校数学のような内容だった。数学の基礎的疑問を解決できるようなものから学びたい(N)」などの声もあり、理解不足の学生への配慮やきめ細かな復習に気を配りつつ、レベルの向上を目指したい。

(2) 物理関連科目においては、物理学・実験について「自身で行い得た実験データを元に原因などを考察する過程が楽しく印象に残っています(H)」「高校のときに学んだ実験を実際にできたので、とても勉強になりました(N)」など印象に残っている科目として「物理実験(H)」を挙げる声が寄せられている。実験特任講師や実験サポート課の職員と連携を取りながら、基礎専門の物理学・実験から専門の実験への橋渡しができるように、学生へのきめ細やかな指導を行っていることが、学生たちに理解されている結果であろう。初年次で、実



験を通じた協働作業や、演習の時間における学び合いを促すように指導していることで、学生たちの横のつながりが構築され、その後の学生生活を豊かなものになっていることが覗えた。レポートの書き方指導のためのオフィスアワーの開設、あるいは、総合学生支援センターからの配慮願いへの対応など、手厚い指導の効果が表れていると考えられる。また講義科目については、物理学1・演習について「物を使って説明しながらの授業がとてもよかった(N)」「身近にある物体にかかる力が分かってよかった(U)」「わかりやすい講義だった。問題のとき方などくわしく教えてくれた(U)」などの意見が寄せられている。1年次の講義であるにもかかわらず習熟度別クラスによる丁寧な授業が印象に残っているようだ。専門科目に繋がる基礎専門科目の役割をより一層果たしていくことが望まれる。

#### 4. まとめ

ASセンターでは専任教員・非常勤教員のほとんどは、1～2年次生の授業を数多く担当しており、今までに培ってきた授業の工夫やノウハウは蓄積され、これを共有してきている。共通教育機構では、さらに授業のねらいや目的を明確にし、学生へのオリエンテーションの充実を図りながら、習熟度別クラスの編成、アドバンス科目の設置、専門科目との連携を強化して、全学的な基礎教育の充実を目指している。また多く非常勤講師を含めて数学・物理の科目毎にそれぞれ責任者（まとめ役）の専任教員を配置しており、時折発生する学生からの注文や意見に対しても迅速に対処できる体制を整えており、迅速な対応に努めている。ASセンターでは、入学時のプレイメントテストを実施して、習熟度別クラスによる授業運営を推し進めてきた。複数学科を合わせてクラス分けすることは、単に習熟度別授業を実現するためだけではない効果もある。「もっとコミュニケーションを取れるようにしたほうがいい」といった声が幾つもあり、学科単独のクラスと、複数学科によるクラスとでは授業中の雰囲気も異なるようである。共通教育機構としての役割を果たせるよう、習熟度別クラス間の調整、科目間の調整、基礎専門科目と専門科目の連携などがさらに必要であろう。また「まわりがうるさい」など授業中の環境についての不満、評価方法に関する意見や休講・補講の連絡が徹底されていない等にも留意しなければならない。

大学院

2018（H30）年度  
「修了生満足度調査結果の検討」

## 2018 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 12 日

大学院工学研究科先端理工学専攻

2018 年度専攻主任 森田 成昭

先端理工学専攻において、2018 年度は 8 名が博士前期課程を修了し、そのうち 7 名から修了生満足度調査の回答を得た(1 名は秋入学/秋修了のため未回答)。10 段階による総合評価の平均は 8.1、標準偏差は 1.2 であり、サンプルサイズが小さいことを考慮する必要はあるが、大多数が高い評価をしたと読み取ることができる。

「本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか。」の設問に対し、獲得度の平均が高かった項目は「専門的な知識・技能」であった(5 段階評価で 4.1)。先端理工学専攻では、「理工学分野の基盤となる基礎科学力を習得し、それぞれの専門分野において柔軟な発想をもって適応できる応用力を身につけている」ことを博士前期課程における学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)のひとつとしており、それぞれの分野における専門的な知識や技能を身につけて本課程を修了したと捉える学生が多かった。逆に、「国際的な視野(専門分野)」、「国際的な視野(異文化理解)」、「国際的な視野(国際交流)」は、いずれも獲得度の平均が低く(それぞれ、2.6, 2.9, 2.9)、前年度からの推移としてみても、獲得度の平均が全て下がっている。先端理工学専攻では、英語科目を選択必修としており、また、国際共同研究を活発に行っている研究室もいくつかあるが、それらが国際的な視野の育成に繋がっていない現状が読み取れる。自由記述欄において、「他大学との交流が少なく感じるのももう少し増えると幅広い知識が身につくのではないかと思います。(国内外問わず)」との意見もあり、本課程で修得した専門的な知識や技能をもとに、国内外の研究者と交流をして、さらに幅を広げるチャンスを与えられていない現状が読み取れる。

「本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・器機などについて全体的に評価して下さい。」の設問に対し、評価の平均が高かったのは「研究室やゼミにおける指導」であった(5 段階評価で 4.7)。これに対し、「大学院履修要覧等の諸資料」、「教務課・学生課／四條畷学務課 事務サービス」、「寝屋川就職課／四條畷就職課 事務サービス」における評価の平均が低く(それぞれ、3.1, 3.1, 3.1)、改善が求められる。

## 2018年度修了生満足度調査結果検討報告書

2019年6月17日

大学院工学研究科電子通信工学専攻  
2018年度 専攻主任 富岡 明宏

2018年度卒業生は5名しかいなかったため、今回のアンケート調査はバラつきと不確定さを伴うものとして分析する必要がある。だが、全体を通して卒業生3名の1昨年度とほぼ同じ傾向の好評価が得られていて、電子通信工学専攻での教育は成功を修めていると言ってよい。特に勉学面での達成度を尋ねた[A]1～4の項目(幅広い分野の教養、専門的知識・技能、論理的に考える力、的確な判断力)については、全員が評価4をつけた1昨年度と比べて、評価5をつけた学生が複数現れており、高い自己達成感を抱いていることがうかがえる。大学院進学の意味が学生に浸透し、かつその意味の実現に成功している、という評価であろう。専攻としては、この高い教育効果を今後も維持するとともに、学部生に大学院進学を一層勧め、進学率を高める努力を継続したい。この効果が実って進学者数は漸増を続けており、今年度のM1は8名まで増加している。6 困難に対処する力、8 コミュニケーション力、9 リーダシップについても比較的高い自己評価になっている。唯一比較的评价が低かったのが「7 国際性」である。だが、他方では自由記述のコメントに「国内・国外での学会発表の経験」、「学会活動」というに記載があるように、学会発表に積極的に取り組んだ学生は、この国際性が身につけているようである。学会発表を奨励する研究室とそれほど積極的でない研究室で大きな差異を生んでいることが懸念される。研究推進だけでなく、大学からの経済的な旅費等の補助も学会発表の大きな動機づけになると期待できよう。また、学会発表を計画することが、期限を設け、それを達成できる適切な研究計画を学生自身が立てることに寄与し、社会に出た後も計画性のある行動を取れる人材に成長する大きな要因となりうるだろう。

この問題に対する対策として、(1)大学院ゼミナールでの発表題目やアブストラクトなどに英語を併記する、(2)担当教員が他大学との協力や外国施設を研究に利用するなど、の努力を続けている。この取り組みを専攻担当教員全員で共有し、講義の中でも英文資料に触れる機会を増やすなど、一層の「国際性」涵養に努めたい。

大学院教育の質の高さは[B]の各項目にも表れている。大学院生は勉学に熱心に取り組む人が多く、講義への取り組み、大学院ゼミナールでの発表、講師による特別講演のいずれにも全員積極的に取り組んだことが窺える。[A]～[C]のいずれの項目についても、大学院生の高い達成感・自己肯定的な評価が現れており、本専攻での教育が高い効果を生んでいるといえよう。今後とも進学率を高め、同じ研究分野の研究仲間を増やしコミュニケーションを活発化することにより、院生がお互いに研究内容を相談したり、助言したりできる環境を構築していきたい。これが院生の研究環境を一層向上させ、充実した大学院生活をおくることにつながる、という正のスパイラルが実現できよう。

## 2018 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 15 日

大学院工学研究科制御機械工学専攻

2018 年度専攻主任 高岡 大造

概ねよい評価結果になっているが、国際的な視野(異文化理解)と国際的な視野(国際交流)については評価結果があまり良くなかった。国際的な視野については、「国際工学技術特論」や「テクニカルコミュニケーション」により浸透させることを考えており、自由意見の中では複数の好印象を持った意見がみられたが、全体的には満足な結果が得られなかったようである。2018 年度に、フィリピンの大学(University of San carlos)との交流を行ったが、今後も拡大することを検討する必要があると考える。

専攻で力を入れている对外発表については、自由意見で満足であったことを述懐しているものが散見され、否定的な意見はなかった。大変喜ばしいことで、今後も力を入れていきたい。

## 2018 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 12 日

大学院工学研究科情報工学専攻

2018 年度専攻主任 小森 政嗣

満足度調査結果の総合評価については、例年になく高い値を示していた（2015 年度：7.4，2016 年度：7.5，2017 年度：7.4，2018 年度：10.0）。しかし、サンプルサイズが小さいため、総合評価の経年変化について何かしらの客観的な結論を導くことは難しい。個々の項目においても総じてリッカート尺度による評価が上限の「5」である回答が大半を占めているため、平均値に基づいて項目間の相対的な比較を行うことも難しい。ここでは最も良い評価の「5」以外の回答を行った回答者数に基づいて検討を行っていく。

本調査の 2015 年度から 2017 年度までの継続的なトレンドを検討した結果から、これまでは「幅広い分野にわたる教養」および「自ら課題を見つけそれに取り組む力」が低下していることが問題となっていた。一方、2018 年度の評価ではこれらの項目において低い評価は見受けられなかった。これらの項目は大学院情報工学専攻のディプロマポリシーにおいて育成することが謳われている能力の一つである

「複雑な科学・技術問題を分析し解決する能力」と関連した項目といえる。2018 年度は、学生が在籍研究室での研究分野以外の幅広い情報工学技術全体に視野を広げられるよう情報工学専攻では様々な取り組みを行った。例えば、実践的な機械学習のチュートリアル講座、およびプログラミング言語 Python を用いたデータサイエンス講座などを授業科目以外に積極的に開催し、大学院生の積極的な参加を促してきた。これらの取り組みが、「幅広い分野にわたる教養」および「自ら課題を見つけそれに取り組む力」の評価の向上に寄与した可能性が考えられる。

一方、2017 年まで評価が継続的に向上していた「国際的な視野」に関する 2 項目（7B，7C）は、今回の調査では他の評価項目と比べて相対的に評価が低く、今後の課題として残った。2017 年度までは海外の研究者を招き大学院生などを対象に講演会を行っていたが 2018 年度は開催しなかったことがこの結果に影響している可能性がある。また、2017 年度は半数の修了生が国際会議での発表や国際誌での論文掲載を経験していたが、2018 年度修了生については国際会議で発表を行った大学院生が 4 名中 1 名しかいなかったことも「国際的な視野」に関連する項目における評価の低さと関係しているだろう。今後は積極的に海外からの講演者の招聘を行うとともに、英語による海外での国際会議発表を促すための施策を行っていく必要がある。また、そのためには、情報工学専攻全体の研究力の向上、および専攻の教員の積極的な外部資金の獲得が必要であろう。

「研究やゼミにおける指導」をはじめとして授業科目に関する満足度は総じて高く、情報工学専攻のカリキュラムが昨年度の修了生に受け入れられていたことを示している。「TA 制度」に関する項目も高く評価されていた。TA を行うことで学部下級生との交流機会が生まれ、より多くの交流が双方にとって有益になったと思われる。今後も より一層下級生との交流機会を増やすことが大学全体を活性化させると考えられる。

一方、施設および設備・機器および事務サービスについては低い評価も見受けられた。これらの項目は継続的に評価が低いことから、今後も改善していく必要がある。

## 2018 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 10 日

大学院総合情報学研究科デジタルゲーム学専攻

2018 年度専攻主任 門林 理恵子

今回の調査結果では、知識や能力の獲得に関する質問[A]は 4.1(昨年度は 4.2), 大学院教育や設備・機器に関する質問[B]は 4.4(昨年度は 4.1), 教育の全体を考慮した総合評価[C]は 9.5(昨年度は 8.1)と全体として高い評価を得られた。特に項目[B]では講義や演習形式の授業, ゼミでの指導などでの満足度が 5 と高い評価を得ることができ, 授業改善などの取り組みの成果が表れていると考える。一方, 項目[A]は, 7A, 7B, 7C の「国際的な視野」と 10 の「他人と強調して物事に取り組む力」のポイントが大きく低下している。これまで, 留学生や研究生の受け入れ, 研究室の枠を超えたプロジェクトの実施などにより, これらの力を修得できる機会を設けてきているが, それに加えてきめ細かい働きかけを行っていく必要があると考えている。

## 2018 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 12 日

大学院総合情報学研究科コンピュータサイエンス専攻

2018 年度専攻主任 升谷 保博

本専攻の総合評価の平均値は、2016→2017→2018 年度で 6.3→8.0→8.0 と変化しており、比較的高い値を維持できている。ただし、2018 年度の分布は 5～10 に広がっており、評価の個人差が大きいことがわかる。

設問[A]「本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか。」については、全項目の平均値は、2016→2017→2018 年度で 3.5→3.7→3.7 と推移しており、大きな変化はない。各項目に注目すると、2017 年度から変化の大きいのは「8 コミュニケーション能力」で 3.6 から 4.4 に上昇している。これは、本専攻では修了条件として対外発表を課していることなどの結果だと思われる。そして、指導教員は責任をもってその指導をしていることから「4 研究やゼミにおける指導」の評価が例年通り高得点を維持しているのだと考えている。一方、「7A 国際的な視野(専門分野)」「7B 国際的な視野(異文化理解)」「7C 国際的な視野(国際交流)」のいずれの値も他の項目に比べると明らかに低いことは残念であり、本専攻の今後の教育の課題の一つである。

設問[B]「本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて全体的に評価してください。」については、全項目の平均値は、2016→2017→2018 年度で 3.4→3.5→4.1 と推移しており、評価が向上していることがわかる。各項目に注目すると、2017 年度からほとんど全てが上昇している。唯一下落しているのが「10 TA 制度(担当者の立場から)」の 4.6→3.8 である。この内容が、業務内容に関するものか手続きに関するものか自由記述を見ても見当が付かない。本学の学部教育では、TA は欠かせない存在であり、この制度をうまく持続していくために今後 TA を担当する学生の声によく耳を傾ける必要がある。

自由記述の設問[D][E][F][G]については、特に目立った否定的な内容はなかったが、ネットワーク環境や生活環境の向上を望む声があるので、その対応が望まれる。また、コンピュータサイエンス演習や対外発表でコミュニケーション能力が鍛えられたとの記述があり、設問[A] 8 の高得点を裏付けている。



## 2018 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2019 年 7 月 9 日

大学院医療福祉工学研究科医療福祉工学専攻

2018 年度専攻主任 田中則子

設問[A]本学での大学院生活を通して獲得した知識や能力においては、すべての項目で 3.0 以上、総評は 4.0 であり、昨年度を 0.4 ポイント上回った。詳細にみると「リーダーシップ」においてのみ 0.4 ポイントの低下が見られたが、その他の項目は上昇していた。昨年度は特別講義の授業においてレポート課題を新規に設定し、さまざまな講演会や学会への積極的な参加を促した。また、海外論文情報の検索・抄読など通じて、学生の国際的な視野拡大にむけて専攻教員と協力して進めてきた成果であると考えられた。今後もこれらの活動をさらに継続するとともに、TA や後輩の指導、専攻内の活動運営を通じて、さらに「リーダーシップ」を育む環境をつくっていきたいと考えている。

設問[B]本学での大学院教育（授業科目群、設備・機器など）においては、すべての項目で 3.1 以上、総評は 4.1 であり、昨年度と比較して 0.4 ポイント上回った。事務資料やサービスに関わる項目の大きな向上が得られ、事務部門による学生サービスの向上が明らかとなった。また、外部講師による特別講義の充実や学会・研修会参加を積極的に促した点も改善が大きかった。今後もさらに満足度を上昇させる様に努力していききたい。

[A] [B]の結果を踏まえ、設問 [C]本学での大学院教育に対する総合評価は、昨年度と比して 1.0 ポイントの改善が見られ、自由記載欄においても好意見が得られた。今後もさらに大学院教育の充実に取り組んでいきたい。

■参考

当報告書と合わせ下記の資料が参考となることを、添えておきます。

『教育基本3方針（ポリシー）』

<http://www.osakac.ac.jp/about/policy/>

2019年8月  
教育開発推進センター  
寝屋川キャンパスF号館2F  
〒572-8530 寝屋川市初町18-8・内線：  
3129